

『十三世紀フランス語聖書』(*Bible française du XIIIe siècle*) 彩飾写本の展開

— 西ヨーロッパと聖地、聖俗の狭間で —

駒田亜紀子 (実践女子大学)

『十三世紀フランス語聖書』は、13世紀第3四半期にパリで成立した初の散文体フランス語完訳聖書である。今日、断片を含め、13世紀後半から15世紀後半にかけて制作された30点余の写本作品が伝存するが、その殆どは14世紀第1四半期までの作例である。現存する写本テキストは概ねイル・ド・フランス周辺で用いられたオイル語の言語的特徴を示すが、挿絵彩飾の様式分析より導出されるその制作地は、言語的与件に反し、イングランドからカタロニアやドイツ語圏まで西ヨーロッパ各地に及ぶ。本発表では、『十三世紀フランス語聖書』写本伝承系統 (*stemma*) 上失われたオリジナルに最も近いとされる写本の一つ、オクスフォード、クライスト・チャーチ図書館所蔵作品 (ms. 178) を中心に、同写本ならびに『十三世紀フランス語聖書』写本コーパスをめぐる錯綜した美術史的状況の考察を通じ、西ヨーロッパ諸地域さらには聖地・十字軍国家に由来する聖俗様々な分野の彩飾写本が『十三世紀フランス語聖書』に及ぼした影響あるいは余波の一端を明らかにしたい。

オクスフォード、クライスト・チャーチ 178 番写本は、『十三世紀フランス語聖書』の新約聖書部分を収録する、1280 年前後フランス北部の制作と推定される作品である。通常、『十三世紀フランス語聖書』写本では、同時代の世俗彩飾写本の形式に倣い、福音書など聖書各書の冒頭に1コラム分の幅のいわゆる段落形式挿絵ないしは物語イニシアルを配する。本作の物語イニシアルもこの形式に準ずるが、ヨハネ伝においては、例外的に、下位分節である章の冒頭にも頻繁に物語イニシアルを挿入する。これらの物語イニシアルは、形式上、①パウロ書簡冒頭に繰り返される“P”のように、本文冒頭の1文字を挿絵の枠取りとする、通常物語イニシアル、②本文冒頭の1文字の形状に関わり無く、冒頭イニシアルの下に内部を複数の区画に仕切った“I”字形を接続し、ここに複数場面構成の挿絵を配するタイプ、に大別される。タイプ①のイニシアルにおいて特徴的なのは、複数の円ないしは半円によりイニシアル内部をさらに区画する形式であるが、これには、同時代のイングランドの詩編集や、十字軍国家において人気を博したいわゆる『カエサルまでの古代史 (*Histoire ancienne jusqu'à César*)』写本のうち1270年代から14世紀中葉にかけてフランス北部やヴェネツィアあるいはアンジュー家支配下のナポリなどで制作された一連の作品との影響関係が考えられる。一方、ヨハネ伝に集中的に現れるタイプ②のイニシアルは、通常の聖書には類例を見ない独特の形式であるが、ラテン語朗読用福音書などイニシアル“I”が頻出する写本から借用された可能性が考えられる。

オクスフォード、クライスト・チャーチ 178 番写本の挿絵彩飾は、成立から比較的短期間のうちに西ヨーロッパ各地に伝播した『十三世紀フランス語聖書』を取り巻く錯綜した状況の縮図である。同時に、『カエサルまでの古代史』とならび、散文体フランス語写本テキストの伝播・普及と十字軍遠征との関わりを探る上で貴重な示唆に富む証人とも言えよう。